第２回　橿原市総合政策審議会　議事録

日時：令和元年８月５日（月）
午後１時３０分～４時
場所：大和信用金庫八木支店
３階　会議室１

＜出席者＞
〇委　員：東委員、飯田委員、石川委員、大城委員、尾田委員、桐山委員、清水委員、
土井委員、中澤委員、久委員、前川委員、牧野委員
〇　市　：岡崎副市長、吉本教育長、福西総合政策部長、山風呂総合政策部部長心得
〇事務局：西村総合政策部副部長、中井企画政策課長、池田企画政策課長補佐、
谷本統括調整員、友井係長、八田主査、杉本主査、中尾主事、大前主事、川野主事

１．開会

２．議事
１）橿原市第３次総合計画総括について

（事務局説明）

清水委員　　この評価の結果は、われわれが読むときに客観的なものと思ったほうがいいのか、あるいは実感が出ているのか。私は実感を現していると思うのですが、担当された方はイメージとしてどのように受け取っておられますか。

事務局　　評価としては、いくつかの課で聞き取りをしたのですが、実感として取っていただいたほうがいいかと思います。というのは、数字で出すのは非常に難しい部分で、評価が人それぞれ意見の分かれるところがありますので、実感として取っていただくのが適切かと思います。

久会長　　市民アンケートで評価を問うときに、先ほどの清水委員のお話はいつも悩むところです。何を悩むかというと、この 10 年間で市役所は施策に取り組んで一定の成果が出ている。しかし、それが市民に実感として伝わっていなければ市民側の評価は下がってくるわけです。先ほどのヒアリングの項目の中でも出ていたと思うのですが、頑張っているのだけれどその実感をうまく伝えきっていないということがあったと思うのです。その場合、第４次にもっていくときに、施策として進んでいないのか、施策としては進んでいるけれど市民のほうに実感として伝えきれていないのか、このあたりはきちんと仕分けをしながら次の 10 年間どう取り組んでいけばいい

のかということを考えていければと思いますので、この総括をもう一度各担当部署もしっかりとそのあたりの要因分析をしながら第４次に活かしていただければと思います。

飯田副会長　今の話に関連してですが、やり方としてはしっかり形を決めて全部同じような形でされていて、資料としてはきれいだと思うのですが、難しいと思ったのは、上下水道には◎がついていて、私は他の会議でも、住宅の整備にともなって上下水の整備がしっかりされていたり、社会資本整備のほうで上下水の計画が非常に計画的に進められているのを知っているので、私は結構良い点をつけると思うのですが、上下水は市民にはそんなにわからないのに、それを聞いて、こういうふうに差があるという評価をするのは、同じようにカチッと揃えるとこうなるわけです。なかなかわかりにくい社会インフラ、とくに地面の下に入っているものについてこういう結果として残しておくのは、いいのか悪いのか、よくわからない。そういう点を踏まえて、これはどなたに聞けばいいですか。

事務局　飯田委員のご質問とは少し違う角度からこの問題は、庁内の策定委員会の中でもアンケートに関する似たような質問がありました。このアンケートは、総合計画は広く全体的な分野に及ぶ関係もありまして、個別の方を対象にピンポイントで取ったものでないので、実感的な評価が含まれていることは認識しています。

飯田副会長　ギャップがある項目についての要因分析に着手されているのはわかるのですが、ギャップの要因を全部同じレベルで探る必要はない項目もあると思います。メリハリをつけて、そこをどういうふうに捉えてまとめるかというのがそもそも総括だと思うので、そこの差に関しては致し方なしというものであれば、そういう総括もあると思います。

他方で、アンケートを同じようにやってしまうと重要な意見を見逃してしまう可能性が多いと思います。分野の分析の中で、これは何をしてきて何が足りないのかというのがまったくわからない状態でそのまま次に送られるということになってくるので、これはかなり深刻かつ、次にその分野で何をすべきかということを抽出するうえで非常に重要なポイントだと思います。全部同じ形で資料としてまとめるのもいいのですが、その中でメリハリに気をつけてほしいと個人的には思いました。

久会長　最初のお話に私もコメントを付け加えますと、例えば、道路整備としては総延長等の整備は進んでいるので職員の評価は高いが、一方で、それのアウトカムということで例えば渋滞が減っているとか、円滑に歩行者や車が通れるようになっているとか、そういう成果が出てきていないので評価が低くなっているかもしれない。アウトプット評価とアウトカム評価の違いがここに現れているかもしれないという読み方ができるわけです。

あるいは「上下水道」は、まだ下水道整備が自分の家まで来ていない方々にとっ

て、総延長がどれだけ延びたとしても、その方にとっては自分の家まで下水道が延びてきているかどうかで評価されますので、そのあたりのギャップが地域的に出てくると顕著になるかもしれません。もう少しなぜということを突き詰めていけば、飯田副会長がおっしゃったように、要因分析がより細かくできる可能性があると思いますので、各担当部署がそれぞれのやり方に沿って、先ほどもご指摘がありましたように全部揃える必要はないので、またご検討いただいたら、次の４次のときにはより活きてくる総括になるのではないかと期待しています。

前川委員　「健康」という項目について、アンケートではどのように市民に尋ねていますか。どういう質問においてこういう結果になったのか、質問の内容を聞きたいと思います。

事務局　「健康」に関する質問ですと、「心身の健康に不安を抱えることなく暮らせるまちが実現しているか」という問いになっていまして、第３次総合計画でめざしている施策の目標があるのですが、そういったまちになっているかというところを市民の方にお尋ねするという問い方になっています。

久会長　私のほうから二点ほどご指摘させていただきます。「文化芸術」で、想定されるギャップの理由が「市民生活に不可欠な行政分野ではないという職員感覚が、ギャップとなって表れたのではないか」となっているのですが、このあたりはとても気になっています。というのは、世界的にクリエイティブ・シティ（創造都市）という考え方で、文化芸術が地域を活性化するときの一つの重要な柱であるという考え方があるわけです。その世界的潮流をあまり意識せずに仕事をされている職員が多いというのは、とても気になるわけです。

二点目は、世界的に英語で「タクティカル・アーバニズム」という、地域を元気にするときに、小さなイベントを繰り返して地域の雰囲気を変えていくというやり方があるわけです。例えば奈良の場合、八木の界隈でもやられていますが、11 月になると町家に現代アートを展示して、「はならぁと」というイベントをやっています。たった２週間だけれど現代アートを展示することによって地域の魅力をどんどん増やしていく、タクティカル・アーバニズムというやり方でやられているわけです。お金をかけずに市民とともにこういうイベントを繰り返していって地域を元気にしていくという、新たな世界的潮流の中で、橿原市は「はならぁと」もやってくださっているし、いくつかそういうのをやっていらっしゃるのです。それをもっと戦略的に柱にすえていけば、市民との協働で地域の活性化が図れるのです。

そういう意味では、「協働」の評価も低いということも含めていえば、今までの感覚ではない世界的な新しいことが起こっているよということを情報収集して、次の第４次の計画に盛り込んでほしい。ここ数十年続いていた流れ、トレンド、傾向で考えるだけではなくて、これから先こういうことが主流になるだろうという、まだあまり実感はもててないけれども、その芽吹きは探せばいくつかあるはずで、そう

いうのをうまく育てていくという観点もぜひほしいと思います。

今までどおりの感覚で評価をしてしまうと見落としがちになることがありますので、そのあたりの新しい考え方も踏まえながら第４次にもっていければと思っていますので、決して総括だけではないプラスアルファを充実させていくのが必要かと思いますし、そういう世界的な流れをうまく情報収集することも今後は重要なので、今度つくるときにはそのあたりの観点も、ぜひとも皆様方のご意見を賜りながら強化させていただければと思います。

２）橿原市第４次総合計画基本構想（案）について

（事務局より資料１について説明）

前川委員　３ページの「社会情勢」のところで、人口の減少は全国的な課題とされていますが、身体活動の不足が大きな課題になっているように思います。世界においても課題の１つとして挙げられていますし、成人ばかりではなく、子どもたちの活動量も減っているし、これは大きな社会情勢だと捉えています。記載しておかないといけないと思いました。

事務局　３ページと４ページに記載している社会情勢は、広く社会全般ということで主に経済活動や国際状況を視点に置いております。身体活動の低下も、大きな課題の１つと認識していますので、序論の構成の中でその表現をどのようにしていったらいいか検討させていただきます。

久会長　おそらく基本計画の中の現状認識で書いていく部分と、この一番大きなところで書いていく部分の書き分けを検討させていただければと思います。前川委員のお話は、人口減少社会をどう捉えるかという中で、地域を支える体力が落ちていく。１つは、人口全体の量的な体力が落ちていく、高齢化が進んでいけばバランスとしても体力が落ちていく、さらに個人一人ひとりの体力も落ちていく、こういうことが重なってますます地域を支える方々の体力が落ちているのではないか、こういうストーリーとして書けば１つの柱として収まると思いましたので、ご検討いただければと思います。

大城委員　20ページ、市民ワークショップから出てきた声のところですが、市民アンケート、職員アンケートともに評価が低い施策とか、ギャップが見られる施策の理由分析をしたところと、市民ワークショップから出てきた声とを比較すると、現実的なところがワークショップのほうでかなり具体的に出てきているのではないかと思います。例えば、「コミュニティ」で市民評価が低い理由は「自治会の必要性等の社会教育不足が要因かと思われる」は、いまいち私はピンと来ないと思いました。ワークショ

ップの声には「自治会が閉鎖的」と出ています。「道路」「市街地整備」でも、ギャップの理由として総括で指摘されていることよりも、ワークショップで気になるところとして「空き家が増えている」「街灯が少ない」「都市計画が進んでいない」、具体的に「渋滞がある」ということが出ているので、このあたりを関連づけて評価の低さの理由の分析に役立てられているのか、確認させていただければと思います。

事務局　20ページの市民ワークショップの声というのは、ワークショップを４回実施した中でいろいろな分野から寄せられた声です。当然その４回の中で個別分野を深掘りしたわけではなく、普段の市民生活の中で感じていることを率直に声として出していただきました。一方、職員に対しては、個別のテーマに絞ってヒアリングをしているのですが、市民の声の分析とか、各課のヒアリングの深掘りの分析が必要かと思います。市民ワークショップの声として代表的なものをあげていますが、その他にもたくさんのお声をいただいていますので、その部分はわれわれ事務局としても原課と共有しながら次期計画につなげていきたいと考えています。

久会長　ぜひともお願いしたいと思います。大城委員がおっしゃった市民自治の部分は、私もここ10年ほど地域活動活性化のお手伝いしていて、先ほどのご指摘は共感する部分があります。このあたりは基本計画をつくるときに市民自治のところでどのように展開するか、また議論させていただいたらと思うのですが、イメージがずれてしまうと構想あるいは基本計画をつくるときの柱がずれてしまう危険性があります。具体的には私も地域活動を応援させていただいて、今の地域活動を担っている方は、今までの活動とか自治会という組織の認識が行き渡らないという、理由をおっしゃるのですが、そこに入っていなくて違う活動をやっている方は、ワークショップの声のように、じつは地域活動に関わりたいのだけれど地域活動のやり方がわれわれの活動のやり方と違うから一緒に入ってやるということにはならないのだという、そういうギャップがありますので、そこの認識をどのように共有していくかというところが基本計画の中で重要になってまいりますので、ここはぜひとも、先ほどご指摘いただいたように、ワークショップの意見も踏まえながら、より総括を深めていただいて、４次につなげていただければと、私からもお願いしておきたいと思います。

石川委員　私はワークショップにずっと参加していまして、老若男女、若いお母さん方から私のような高齢者まで多彩に議論をしていろいろな意見が出ました。これについては、会長がおっしゃったように、基本計画の中で市民の意見として反映できたらと思います。

久会長　そのためにワークショップをやったと認識していますので、ぜひとも基本計画の中で取り上げていただくとありがたいと思っています。

中澤委員　３ページの「社会情勢」ですが、今、観光でもインバウンドということで外国人がかなり大勢来られています。橿原はまだまだというところかもわかりませんが。就労の部分でも、入管法の改正で外国人の特定技能という新しい制度ができました。今のところまだ橿原市で受け入れているところはないと思いますが、今後10年を見据えたときに、例えば「多様性が尊重され、支え合いが重視される時代」の中に外国人という視点を入れていくべきなのか、そういう方向でいくべきかということも含めてご検討いただきたいと思います。

事務局　３ページの「社会情勢」は「策定時点」と表記していますが、先を見通した形でいろいろな要素を、外国人の問題とか、ＳＤＧｓは次のページでふれているのですが、そういった要素も盛り込んで、精緻化していきたいと考えています。

久会長　私から一点、３ページの３番目の「ＩＣＴの急速な普及と社会の変化」の書きぶりが古いという感じがします。Society 5.0とか、ＡＩとか、いろいろ進んでいますので、最先端のものに変えていただくようご検討いただければと思います。

それでは22ページ以降に入りまして、この３案のどれにするか、政策体系は２つのやり方のどちらを中心に議論を進めていくか、ご意見を賜りたいと思います。

前川委員　先ほどは会長さんに補足していただいて、市民一人ひとりの体力を向上させていくことは市の力になると信じているのですが、それには教育現場でヘルスリテラシーの育成を着実にしていかないと定着していかないと思っています。幼少期からの健康教育と、情報が氾濫している中で健康につながる情報を見極める力を幼少期から高齢期まですべての人たちにできるだけ提供できるような政策が必要だと考えております。人口が減少するのは避けられないというイメージをもちますが、生きている一人ひとりが強靭なものになっていくという方向も１つの考え方ではないかと思います。

久会長　そのあたりものちの議論の中で取り上げていければと思います。

22ページからの説明の際に、交流人口とか関係人口という話があったのですが、私は最近いくつかの市で「活動人口」という言い方をしておりまして、橿原市民の中でどれだけの方々が地域活動とか市民活動に関わっておられるのか、関わる方を増やすことによって地域の力を強くしていくという考え方もあると思います。柱の説明の中には「関係」「交流」という外からの人の力を借りるというのはありますが、実際に橿原市民全体がいろいろな活動に積極的に関わっていく割合を増やしていくという考え方をぜひとも柱の説明に盛り込んでいただいたらと期待しています。

それでは、ビジョンは案１、案２、案３と３つ出ていますが、かなり好みの問題も入ってくると思いますので、ご遠慮なさらずに、賛否のご意見を賜ればと思います。個人的な好みでけっこうでございますので、いかがでしょうか。

飯田副会長　最初に、進め方の確認をさせていただきたいのですが、この資料では、ビジョンが最初にボンと出て、そのあとに政策を割り当てているという感じですが、実際にはこういった総括も含めて、こういうことをしなければいけないよねという政策が見えてきて、そこから言葉としてビジョンができるということもあるので、ここで議論するのは、ビジョンだけの言葉づかいでいいのか、それとも、その下に出ている政策体系も見据えながら話を進めていくのか、どちらでしょうか。

久会長　いずれでもけっこうですが、私は個人的には、将来ビジョンの言葉に柱を矢印で関連づけていますが、このあたりはいかようにも組み合わせを変えられるのではないかと思っています。市のほうも、この中身よりも、政策体系が４プラス１なのか、５なのか、このあたりをどうするかを聞かせていただいて、組み合わせはまた変えていけるのではないかと思っています。

飯田副会長　なぜその質問をしたかというと、政策体系に出ている言葉が、例えば「人（世代別）」とか「人（全般）」とか、中身は上のビジョンに引っ張られてだいぶん変わってしまっていて、そういうのでいいのかと疑問を感じたので確認をさせていただきました。それは進めながらある意味柔軟にすればよいというお答えでしたので、そういうように考えさせていただきます。

それを踏まえて意見ですが、私はこの中で一番いいと思ったキーワードは、案１の「つながる」という言葉です。これは総括とか今の時代背景、例えば地域連携、公共交通ネットワーク、いろいろな意味で橿原市が担う１つの役割として、やらなければいけないことも含めて「つながる」という言葉はキーワードになるのではないかと個人的に思っています。ただ、案１自体を気に入っているわけではなくて、というのは、言葉のレベルというのもあるかなと思うのです。いろいろな概念をつくりだす「つながる」という言葉と「暮らす」というかなり現実的なイメージ、すぐ思いついてしまいそうな言葉が並ぶのは、つくり方としてはもう少し考えたほうがいいと思います。

言葉のレベルが揃っていて、ある程度イメージをやわらかく伝えている案としては、案２がいいのではないかと思いました。案３の「歴史が薫り」という、そこはかなり抽象的すぎて、その言葉を聞いたときに具体的なイメージが伝わりにくいので、消去法でいくと、言葉の並び、響きというのは案２がいいと思ったのですが、この中に「つながる」という概念が入れにくいので、どうしようかなという感じで思っているのが現状です。

久会長　案２が言葉としてはいいけれど「つながる」という言葉も欲しいなという、そういうご意見ですね。

石川委員　一番の課題は人口減少で、これに対応するような施策をつくっていかないといけないというのが前回の議論だったと思います。その意味からすると、案１の場合は、

「つながる」は先ほどおっしゃったような意味合いで移住先としても選ばれると考えますと。私は、この10年間で総合計画を策定して実施するのであれば、一番の課題は人口減少だと思うのです。その人口減少に対応するための施策を実施していくのが一番の課題だと考えます。

なぜかというと、23ページに分野として「財政運営」と書いています。生産年齢人口が増えて財源の確保をした中でいろいろな施策を展開していくのが基本だと思います。そうでないと、積み残しが出てくると思うのです。やろうにも、お金もない人もないと何もできませんから、そういう意味で人口が増えていかないと何も始まらないと思います。人口が増えれば、先ほど会長がおっしゃったように、いろいろなイベントもできるでしょうし、参加する人口も増えてくるでしょうし、活性化を図れるのではないかと思いますので、こういった点からも私は案１がいいと思います。

大城委員　私は橿原市外の人間なので、パッと見たときに、案１の最初に「暮らす」という言葉がボンとくるのは、「新案」のところに「暮らす」を先頭にもってくる理由は「今住んでいる人の満足があってはじめて」と書いてあるので、この言葉が最初にきていると思うのですが、何となくこの言葉が最初にくることで、これからこのまちに来ようとしている人にとって、まず暮らしている人がメインターゲットだというようなイメージで、何となく排除されるような感じを受けました。

言葉のまとまりとしては、案２のほうが広がりのあるイメージでまとまっていて、未来につながりやすいという印象をもちました。

清水委員　案３はすごく格調のあるような感じがするので、いやです。何となくよそから来ている感じがして、市民の方が、自分がこういうふうにやろうというほうがいいのではないかと思うので、案１か案２だと思います。案１は、言葉としていろいろ問題があると思うのですが、「つながる」という言葉の魅力がある。これは「つながる」という言葉を使って書き直すことも可能なのか、あるいは案１でなければ「つながる」という言葉は出てこないのか、できれば「つながる」という言葉は活かしてほしいと思います。

久会長　飯田委員も同じ意見でしたので、皆さんが案２に決めるということになれば、ここに「つながる」という言葉を盛り込めないか、もう一回事務局に投げて、また検討いただくことはできると思います。

桐山委員　政策体系としては４プラス１かと思います。言葉としては案１がいいのかなと思います。イメージがしやすいということで案１がいいと思ったのですが、まちづくりの理念ということよりも、橿原市といえば歴史がずっとあるということを言葉の中に入れていただきたいという思いがあったので、修正ができるというお話がありましたので、誇りある歴史を大切にしている私たちのまちのことが案１に入ればい

いなと思いました。

東委員　政策体系は４プラス１がいいと思っているのですが、言葉の話は微妙なので、それなりに上位の話をしたらいいのかと思っていまして、「人間中心」の社会ということをＧ２０で合意されたので、「人」は入れたほうがいいと思います。案１、２、３の中で人のことをわかりやすい言葉でいっているのは案１だろうと思います。ただ、あまりにもレイヤーが低い。まちづくりの理念に「人」が入っているからいいのかなという見方をしますと、言葉がきれいなのは案２で、「はじまりから未来へ」ということで流れが見えます。そこへ何かしら「人」の要素を入れることができたら、先ほどの「つながり」もそうですが、そこは１と２のミックスが一番きれいだと思います。そのレベルで考えたほうがいいのかなと思います。

尾田委員　私も案１がいいと思います。私は自治会から来ていますので、「つながり」が一番大事だと常に思っています。それで案１がいいと思います。

土井委員　案２と案３は、原案が「交流都市」を前面に出しているのでこういう文言になっているのかと思うのですが、やはり「暮らす」という、市民が暮らしやすいというのを前面に出すべきだと思いますので、案１の言葉がすべていいとは思わないのですが、案２と案３は原案からするとちょっと違うのかなと思いますので、この中では案１をベースに言葉を変更するような形で検討したらどうかと思います。

中澤委員　言葉からすると案１が一番望ましいと思います。市民の方が快適に暮らせるまちづくりを進めることによって、市外から橿原市に移ってきていただけるような方も出てくるのではないかと思います。案２と案３はどちらも「交流のまち」が最後にきているので、市民の方からすると若干狭いような気がするのではないか。「きらめくまち」がいいのかどうかわかりませんが、快適に暮らせて、いろいろな人がつながって、魅力あふれるまちという意味合いなのかなということで、案１がいいと思いました。

政策体系は４プラス１と５つ並べたのと計画にしたときにどういう違いが出てくるのかよくわからないのですが、感覚としては４プラス１が望ましいと思います。

前川委員　橿原市という土地柄のイメージが湧いてくるのが案２の「はじまりから未来へ」という言葉だと思います。ビジョンとして考えている内容が最もストレートにわかるのは案１で、「暮らす、つながる、きらめくまち　かしはら」という言葉はいいと思うのですが、これは他の市でも同じような言葉でスローガンをつくれるのではないか。橿原でなければいえない言葉を盛り込んだほうがいいと思いますので、案２の変型を希望します。

牧野委員　あくまでも主体は市民・住民なので、そこのところをわかりやすくしないといけ

ないと思うのです。案１は比較的そこに近いと思うのですが、案２と３は「交流」というのが出てくるので、そこの部分ではフォーカスがぶれているのではないかという感じがします。そこはもう少し主体となる市民・住民にわかりやすさとか、理解されやすいとか、そのへんが重要だと思います。

政策体系は、基本的には４プラス１だと思うのですが、果たして⑤「連携と行政運営」は横串をきちんとさせるのか。横串をさせますよというのを明確にして４プラス１を出していかないと、主体となるべき市民・住民に響かないのではないかと思いますので、そのへんはもう少し打ち出し方とかやり方があるのかなと思います。

久会長　　案３に賛成の方はないというのはわかりましたが、案１と案２が半々ぐらいです。私は個人的には前川委員のお話とよく似ていて、案１はすっきりしていいのですが、これは他市でも同じ言葉が使えるのです。「はじまり」ということを堂々といえるのは橿原市しかないので、「日本国はじまりの地」は橿原市の専売特許というか、ここは活かしたいと思うのですが、「交流のまち」といってしまうと、住民のためではなくてというニュアンスがあるので、ちょっと無理矢理の折衷案ですけれど、「はじまりから未来へ」を案１の前につけて、「はじまりから未来へ、暮らす、つながる、きらめくまち　かしはら」が、このあたりの収めどころとしてはいいのかなと思いますが、どうでしょうか。案１と２の折衷案として、はじまりとか歴史というものを案１の中に盛り込みながら、橿原市らしさというものも込めてご検討いただくということで、審議会としてのご意見でよろしいでしょうか。そのあたりで事務局で修文作業をしていただければと思います。

政策体系は、４プラス１だけではなくて、24 ページと 25 ページが対になっていますので、ここを見ていただくとよくわかると思うのですが、微妙に分野の組み合わせも違うのです。ですから４プラス１にしたとしても、その組み合わせが 24 ページのパターンなのか、25 ページのパターンなのかというのもありますし、他の組み合わせも考えられるのではないかと思います。分野の組み合わせも含めて体系化のやり方を議論させていただければと思います。今までいただいた意見では、横串をさすという４プラス１がいいという意見が多かったのですが、いやいや横並びがいいというご意見はございますか。

ないようでしたら、分野の組み合わせはどうでしょうか。左の組み合わせと右の組み合わせは微妙に違うのです。こちらのほうがわかりやすいとか、こういう組み合わせ方もあるのではないかとか、そういうご意見がございましたらいただければと思います。

事務局　　政策体系につきましては４プラス１の形で、今後事務局で作業を進めてまいりまして、分野の構成については、今後３回目、４回目の会議で具体的に施策の体系をお示しした中でご議論いただければと考えています。

久会長　　そのあたりはまた編集作業にもなりますので縦横無尽にできるのかなということ

ですが、こういう観点が欲しいとか、こういう組み合わせが重要ではないかということがございましたら、お出しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

それでは私のほうから１つ、これからますます情報社会が進展する中で、情報という捉え方が今のところ弱いかなと思うのです。情報発信になってしまっていますので、情報発信だけではないと思うのです。「情報政策」が今後ますます重要になってくるので、「情報政策」という柱が言葉としてないのがちょっと不安です。「情報政策」という観点も重要ではないかと思います。

このあたりは中で議論しながら、最終的な編集をどうするかというのは次回以降考えさせていただきたいと思います。

３）人口推計について

（事務局より資料３について説明）

久会長　施策をどう打つか、その効果がどう出てくるかによってかなり違いが出てきますので、そのあたりを頑張る数値としてこれでやっていきたいということです。

前川委員　この数値には外国人労働者の人数は入っているのでしょうか。

事務局　労働者というような数値の取り方ではなく、住民登録をされている方の数値はこの中に入っています。労働者という部分では計算の中には入っていません。

前川委員　外国人の就労の幅が広がってきているのを捉えて、外国人の受け入れとかを評価していくと、この数値は少し変わってくると見てよろしいでしょうか。

事務局　本市の住民票登録されている外国人は 1,000 人ちょっとです。過去の状況から見ると、今年４月に入管法が改正されましたが、爆発的に増えているわけではなく横ばいです。ただ、それが今後 10 年、20 年、そして、2060 年を見据えたときにどうなっているかはなかなか予測しがたい部分があります。人口ビジョンについては、国のほうから出されている数式を基にして作成している関係もあって、例えば地区別に積み上げたものでもなくて全体として数字の幅がどういうふうに推移するかといったものですので、個別のそういった要素はこの中には入りにくくなっています。

久会長　今後どういう施策をとって、どういう方に住んでいただくかというところを決めることによって、そのあたりが加わってくるかと思うのです。今の推計の中には、どんな方をというところまではまだまだ見えてこないので、今後そのあたりは計画づくりの中で議論させていただければと思います。

清水委員　　合計特殊出生率 1.83 は、日本全体の共通の数字ですか、あるいは橿原市の数字ですか。

事務局　　合計特殊出生率 1.83 は、国民希望出生率になります。

清水委員　　橿原市ではなく日本全体ですか。橿原市の実態としてはどれくらいですか。

事務局　　厚生労働省で出されている数値によると橿原市は 1.37 です。

久会長　　合計特殊出生率は地方部のほうが高いのです。都市部はなかなか子育てが厳しいということで、東京とか大阪とか大都市圏は非常に低い。逆に沖縄とか暮らしやすくて子どもを育てやすい地域は高くなっています。橿原市がどういう子育て環境を用意していくかというところが人口推計の中で重要になってくると思います。

これは庁内ではパターン⑥で進めておられるということですが、計画策定の中でどんな施策をどう用意するかによってもう少し人口を増やせるのではないかというようなことが見えてまいりましたら、そのあたりも踏まえて最終的には調整をしていただければと思います。

４）橿原市第２次まち・ひと・しごと創生総合戦略の策定について

（事務局より資料３について説明）

石川委員　　総合戦略は総合計画の中に含有するということではないのでしょうか。これは別立てで策定されるのでしょうか。ここがちょっとわからないのです。

久会長　　総合計画との関係をもう少し説明していただきたいと思います。

事務局　　総合戦略は総合計画と密接に関係あるもので、総合計画は、計画の性質上、全体を網羅する必要がございます。総合戦略は、国からある程度大きな方針を示されておりますが、本市としましては、第１次まち・ひと・しごと創生総合戦略は、すでに策定された第３次総合計画の中で平成 27 年度につくらせていただきました。今度は、現在策定中の総合計画で、とくに重点的な項目を総合戦略と位置づけて進めてまいりたいと考えています。

久会長　　一緒に考えて、でも冊子としては別物にするという考え方ですか。

事務局　　いえ、冊子は一緒です。

久会長　　総合計画の場合は、各分野を総花的に書く必要があるのですが、総合戦略の場合は、そこから重点的なものを抜きだしてストーリーをつくって、より先鋭化していく、景気動向の高いものにしていくということになりますので、その意味では、中身としては総合計画のほうから重点的なものを抜き出しながら先鋭化したストーリーをつくっていくという、こういう理解でお願いできたらと思います。

石川委員　　わかりました。

清水委員　　子育ての施策については、今は子育てについては保育所をつくるということになっていますが、総合戦略が始まったときはそうではなくて、保育所だけではなかなか子育てができなくて、地域のコミュニティとか地域社会が支えていかないと子育てはうまくできないというところに最初はポイントがあったはずです。それがいつの間にか保育所をつくることに流れてしまって、その結果、合計特殊出生率は上がったけれど東京への集中がかえって加速したのが今の状況です。

ですから、保育所だけに偏らないように、地域社会とかコミュニティが子育てを応援するという部分を入れていただければ、出生率は上がるし、そこに向かって東京から来てくれるかどうかは別にして人口を増やす形になって、世界の人が橿原に来ていただける、そういうことにもつながるのではないかと思いますので、そういう点をご配慮いただければと思います。

久会長　　清水委員のお話を違う言い方をすれば、保育サービスを拡充することによって、子どもを預け、今までどおり働けるようにするということであれば、何の特徴もなくなってくるので、橿原市で子育てをするというのであれば、サービスの拡充ではなくて、もっと魅力づけが必要ではないかと思うのです。地方部に行けば非常にいい環境の中で子育てができるという、環境そのものがウリになるわけです。では橿原で子育てというのは他の地域に比べてどう特徴づけていけるのかという観点で考えていただければと思います。それは自然環境なのか、人のやさしさみたいなものを特徴とするのかというのはまた考えていただければと思います。

飯田副会長　　先ほど政策体系のところで会長が「情報政策」がここに入ってこないといけないよねとおっしゃいました。総合戦略の 23 ページの「論点」にはたしかに「情報交流」という言葉はありますが、おそらく会長がいわれた内容はそんなことではなくて、全体をつなぐというか、シーズをうまくつなげてニーズにできるだけ対応するような、情報政策にはいろいろな意味があると思うのですが、そういう観点は今のところここには見られないと思うのです。

久会長　　そういう観点が必要ですよというご意見ですね。

飯田副会長　　そうです。今あるいろいろな資源をうまく使って、困っている状態もしくはニー

ズに対応していくというのが、私が「つながる」という言葉に気持ちが惹かれている１つの理由だと思うのです。それをもう少し今風の言葉でいえば、それがMaaSになったりいろいろな言葉になっていくと思うので、情報政策を形にしたような柱を立てて、次の創生総合戦略の中に組み込んでいただきたいと思います。どこか決まっていればもう少し具体的に話ができるのかちょっとつかみにくいので言葉足らずかもしれませんが、とりあえず思ったことを申しあげました。

石川委員　最後の「論点」にはいろいろな項目があるのですが、これを実施していくのは、今の課でやるのか、それとも体制を新たに組んで取り組んでいくつもりなのか。これを推進していくとなると専門にやっていかないと片手間ではできないのではないかと思います。短い間でこれを達成していかないといけないわけですから、トップは入らなくてもNo.２の方から部長さんも含めて、これをどういう体制でやるつもりなのか、その意気込みをお聞きしたいのですが。

福西部長　今日の総合政策審議会の場には副市長もお見えいただいております。石川委員のお話は、こういった総合戦略を進めていくうえにおける体制というお話かと思います。当然、橿原市では地方創生の取り組みの重要性は十分認識しておりますので、体制づくりについての考え方も整理をしているところです。今後、数年後になるかもわかりませんが、庁舎の建設を計画していますので、万葉ホールの教育委員会の統合も行ってまいります。最終的には、庁舎が完成した時点の組織を見据えつつ、今の総合戦略にも対応できるような組織づくりを検討して、しっかりと取り組んでいきたいと考えております。

久会長　私のほうから何点か、1,000以上の市町村でこの取り組みが進んでおりますので、そろそろ成功しているところとそうでないところが見えてきています。成功しているところはどこに特徴があるのかということを分析すると、橿原市が第２次をどうつくっていくかということが見えてくると思います。

私なりにいえば、何か先鋭化したものがあるところは当然集まってきているわけです。一言でいうと、「〇〇するなら橿原」という、この〇〇がバシッといえるのかどうか。それが全国的に共感を得るところまでうまくＰＲできるのかどうか、これが勝負かなと思うのです。新しいものをつくるよりも今ある特徴的なものをうまく使っていくのがポイントなので、一言でこの総合戦略の魅力を説明したら何なのかという柱をしっかりつくっていくということかと思います。

交流人口の話も書いてはあるのですが、うまくやっている徳島県の神山町や上勝町は、まずは観光客のリピーター客を増やしていくわけです。一見さんを増やしても何にもならないので、何度も訪れてくれる方をつくっていく。そのうち定住したい方が現れますが、直接来て定住するのはハードルが高いので、おためし定住のような仕組みが組み込まれている。そこで自信がついた人たちが定住にいく。こういう三段構えで定住にもっていけているのです。そのようなシナリオを組み合わせて

つくっていただくのが重要かなと思いました。ただ、何でも彼でも人が来ればいいというものでもない。来た方をどうやって最終的に橿原の魅力を感じて定住までもっていけるのかという戦略をかなり緻密につくっていただければいいかと思います。

三つ目は、魅力的な暮らし方をしている方が増えれば増えるほど、そのＰＲ効果が非常に高くなってきます。誰々さんが住んでいるから、こんな暮らしができるから、ここに住みたいというところがかなりアピールする力をもっていると思います。魅力的な暮らし方をしている方をどんどん紹介していくということが重要です。

さらにいえば、先ほど清水委員から発言のあった、どういう子育て環境を充実させていくかという話でいうと、大阪の摂津市に「マミー・クリスタル」という、子育てママさんたちのサークルがあるのですが、500名を越す会員さんがおられます。マミー・クリスタルの発想は、名前のとおりお母さんが輝くのです。初代の会長さんがおっしゃるのは、会長さんが摂津に来られて、子育て層の人たちのニーズを聞いてこられたのです。子どもを預かるとか子どもに対する政策はいっぱいあるけれど、お母さんが輝くような支援をしてくださいと。例えばお母さんが起業するとか、お母さんが夢を実現するとか、そういうものを応援する施策がほとんどない。ないのだったら自分たちで手を組んで動かしたいということで、マミー・クリスタルという団体をつくり動かしはじめたのです。どうしても子どもを預けるというところに主眼がいくけれど、そうではなくて、一人ひとりの子育て層の方々の夢を実現できるような施策を重点的に考えていただければ嬉しいと思います。

生駒市はかなり積極的に子育て層の方々の夢を実現できるような、そういうことでまず定住層の人の満足度を上げ、それが評判を呼んで移住層も入ってこられるような戦略をうまく組み立てておられるので、誰に焦点をあてるのかというところでも、いろいろ明確化をして考えていただきたいと思います。観光客とか移住者とかバクッとした切り口ではなくて、ターゲッティングをはっきりして、それに対してどのような施策を打っていけば、そういう方々に届くのかというところをよりきめ細かく考えていただければ嬉しいと思いますし、それが１つの柱の中でうまくストーリー立てて連携していけば、より効果が出てくると思いますので、そのあたりはまた考えていただければと思います。

石川委員　論点に「奈良県立医科大学周辺のまちづくり」とあるのですが、これは大学が移転するについてその周辺のまちを考えましょうということだと思うのです。これはいいチャンスだと思いますので、例えば企業の誘致とか、雇用を促進できる施策を十分に考えた中で取り組んでいただきたい。これは大きい事業ですので、いいチャンスだと思います。大学の移転自体は県がやるわけですから、橿原市はその周辺のまちをどうするのかということを、企業を誘致することを考えられて、橿原市にメリットがあるようなまちづくりを推進していただきたいと思います。

久会長　その点に関しても、どういう方にどういう仕事を提供できるのかというターゲットを明確にもっていただければ嬉しいと思います。先ほど飯田委員がおっしゃった

情報政策もその一環ですが、きちんとデータ分析をして、橿原市の特徴はどこにあるのだろうか、どういう方がどういうニーズをもっているのかということをマーケティング的に分析していただくといいかと思います。

ちなみに、生駒市の１期目の総合戦略を私がお手伝いするときにデータとして出てきたのは、生駒市は大学院卒の専業主婦が極めて多いという特徴があるのです。つまりすごいエリートだけれど働いておられずに専業主婦をやっている方が非常に多い。これはもったいないですよと。専業主婦の方も別に家庭に閉じこもろうと思って専業主婦をやっているのではなくて、何か社会活動をやっていらっしゃるし、そういう方々が起業までつながっていけば何か面白いことができるのではないかということで、女性の起業を応援しようという仕組みもつくったのです。このあたりはデータに基づいて戦略を組んでいますので、そういう意味では、橿原市の特徴というのはどこにあるのか、その方々に対してどういう仕事を生み出していけば、うまくニーズとフィットしていくのかということを分析していただければ嬉しいと思います。

それでは、これもまた継続審議になりますので、今日のお話を参考にしながらまた練っていただければと思います。

それでは、以上で予定をしておりました案件はすべて終了しましたが、皆様方から、前の案件にさかのぼってもけっこうですので、全体的に何かございますか。

石川委員　今後策定するについて、庁内でやられるということですが、財源について十分に検討していただきたいと思います。財源の確保をどうするのか。一般的に市税を個人であれ法人であれ上げるのは簡単だと思うのですが、それをすると市民は全部逃げてしまうので、そうすることなく、いかに財源を確保してくるのかということを十分に検討していただけたらと思います。

というのは、総合計画であれ創生総合戦略であれ、人とお金がかかると思うので、かからない方法もあるのでしょうけれど、かかることのほうが多いと思いますので、担当課にすれば、お金がもらえないからこの事業はできないのだというので未達成にすることもあるかもわかりませんので、十分なる財源をそこに注入できるようにするにはどうしたらいいかということも真剣に考えていただきたいと思います。

久会長　そのあたりは総合計画の中でも持続可能な行財政運営の話が出てまいりますので、そこでも議論させていただけるかと思います。

他はいかがでしょうか。なければ、今日は案件が多岐にわたりましたので、少し時間が延びてしまいまして申し訳ございませんでした。それでは、以上で私のほうの進行は終了させていただきます。どうもご協力ありがとうございました。それでは、進行を事務局のほうにお返しいたします。

３．その他

事務局　　次回は 10 月 15 日火曜日午後 1 時 30 分から本日と同じ会場で開催予定。

４．閉会

以上